

# 令和7年度 学校評価報告書

学校名	三田市立志手原小学校
-----	------------

## 1 学校教育目標

自ら学ぶ意欲と方法を身につけた心豊かな志手原っ子の育成

## 2 今年度の学校重点目標

- ・基礎基本の定着を図り、確かな学力をつける。
- ・学校全体で協働して授業改善を進める。
- ・健やかな体を作るための力を育む教育を進める。
- ・豊かな人間性や社会性を培い、ともに伸びる姿勢を育む。
- ・地域の素材を活かした授業に取り組む。
- ・安全で、豊かな教育環境の実現を図る。
- ・家庭や地域と課題を共有し、子どもの健やかな育ちを図る。
- ・適正な予算執行に努めると共に、明確な会計管理を徹底する。

## 3 総合的な自己評価

小規模校のよさを活かしつつ、自ら学ぶ意欲と方法を身につけた心豊かな志手原っ子の育成をめざし教育活動に取り組んできた。学ぶ意欲と方法については、朝の学習タイムにおける「ICT活用」や「読書活動」を通して継続して取り組んできた。また今年度は、3年生以上で学団教科担任制を導入した。児童や保護者から肯定的な評価を得るとともに、多面的な児童理解や教員同士の支え合いの面でも一定の効果を得ることができた。さらに掃除を週2回とすることで、下校時刻を最大30分繰り上げることができ、教職員の教材準備や打ち合わせ時間を確保することができた。一方、読書習慣や学習習慣については、課題が見られる。また、挨拶や言葉遣いについても改善の余地があり、引き続き家庭や地域と連携した取り組みが必要である。

## 4 総合的な学校関係者評価

3年生以上での学団教科担任制の導入や掃除の回数を減らして下校時刻を繰り上げるなど、新たな試みは評価できる。読書習慣や学習習慣、挨拶や言葉遣いをはじめとした生活習慣は、学校だけの指導では効果が限定的である。家庭や地域と連携して継続的に取り組んでいく必要がある。志手原小学校としても一人一人の児童に寄り添った教育を行っているが、さらにきめ細かく支援していくためには、教育相談体制と個別の教育支援の充実を図る必要がある。人的配置の拡充が求められる。放課後子ども教室や家庭教育学級、こうみん未来塾や学校支援ボランティアでの取り組み、米作りや黒大豆作りのサポートなど地域の人材を活用した体験的な教育活動を、志手原っ子の育成の機会として取り組んでほしい。

## 5 評価結果

自己評価			学校関係者評価	
分野・領域	評価項目(取組内容)	評価結果及び分析	改善の方策	学校関係者評価委員会の意見
教育目標 学校評価	教育目標や重点目標にもとづき、目標達成に向けて教育活動に取り組んでいる。	今年度も「自ら学ぶ意欲と方法を身につける」目標を掲げてきた。学校の小規模化が進む中、児童の主体性を伸長することは本校の継続した課題である。先生や友達との、深く固定化された関係性に対する具体的なアプローチが求められる。今年度は教科担任制を導入し、複数の教員の多面的な関わりを通して児童の良さや主体性を引き出す取り組み成果を挙げつつある。	主体性の伸長は、本校の取り組みの柱として今後も目標に位置付け取り組む必要がある。職員間で共通理解を図りながら、教育活動のあらゆる場面で、意図的・計画的に、児童の主体性を育む取り組みを設定していきたい。今年度からスタートした教科担任制は、運営面で見られた課題の改善策を講じつつ、引き続き実施していく。	主体性を発揮できるように、児童一人一人に応じたきめ細やかな教育活動のしくみをこれからも追求していただきたい。
	めざす児童像の実現に向けて、学習面・生活面で取り組み、適切に評価を行っている。	自ら学ぶ意欲と方法を的確に身につけ、自分らしさを発揮した姿を「笑顔いっぱいの志手原っ子」と設定し、教職員の共通理解のもと教育活動を進めてきた。今年度はめざす児童像の重点事項を定め、教職員間でイメージを共有することに努めた。また児童に対しても、始業式や終業式で振り返りの場を設け、意識づけを図ってきた。	教職員のなかで目指す児童像のイメージを共有できたが、育成のプロセスや手法には、ややばらつきがあったのではないかと考えられる。教員同士の意見交換をもとに、育成の具体を更に明確にし、その取り組みを家庭とも連携しながら確かな取り組みを進める。	全ての児童が、毎日学校に行くのが楽しみだと思えるように学習面や生活面について引き続き取り組んでほしい。また、家庭や地域としても、学校と共通の目標をもって取り組んでいきたい。
教育課程 学習指導	今年度本格的に実施した学団教科担任制を充実させることができています。	児童の自主性の伸長、多面的な児童理解を目的に、今年度から3年生以上の学年で、学団を基本とする教科担任制に取り組んできた。児童の肯定的な受け止めも多く、多面的な児童理解や担任同士の支え合いでも一定の効果が見られた。その一方、未だ手探りの取り組みであり、担任の不安や負担を軽減するシステム作り、円滑に推進する条件整備が、引き続き求められる。	これまでも志手原小学校では、運動会や音楽会等の大きな行事を低中高の学団で取り組んできた。また、図工と体育の教科交換を行い教科担任制も行ってきた。こうした素地を生かし、今年度はさらに教科を増やして教科担任制を推進した。実際に取り組んで明確になったよさや課題を検討し、小規模校である志手原小学校のよさを生かす教科担任制を模索する。	いろいろな先生に教えていただくことは、児童にとっても有益であり、学団の児童同士の交流も深まる。志手原ならではのよさを生かしてほしい。クラス担任が明確になっていることが児童の安心感につながるのではないかと考える。
	週時程や学校行事の年間計画は、内容及び取組時間が適切である。	昨年度まで秋開催だった運動会を、熱中症対策で今年度から一学期開催に変更し、昨年度と同じ練習時間授業時数で完遂することができた。音楽会は、1学期末から授業時間で練習を始め、1カ月前からは特別時間割で練習したが大きく超過することはなく計画は適切だった。児童も達成感や満足感、充実感を得ることができた。	運動会の開催時期を1学期に変更したことで、熱中症等のトラブルなく、安心安全な環境で練習を進めることができた。来年度も運動会を1学期開催することとする。音楽会は、選曲や練習方法を工夫し、特別時間割での練習期間を増やすことなく、なるべく通常の授業時間で練習ができるように共通理解を図る。	行事のたびに児童の成長が実感できた。先生方も授業と行事に向けた練習を行い大変だと思う。運動会を1学期にしたことは有益だった。
	基礎的・基本的な内容を習得させ、授業改善を通して、確かな学力の向上に取り組んでいる。	学校では基礎的・基本的な学力の定着を目指して学習指導に取り組んできた。今年度はノート指導に重点を置き、書くことを通して考えを整理し、学びを確かなものにするべく取り組んできた。その一方、児童の「言葉の力」と「学習習慣」の育成が課題であると考えている。学校では「読書タイム」や「家族読書の日」を設定し言葉の力を育成すべく取り組んでいるものの、読書習慣については、教職員と保護者共に低い評価となった。また、主体的な「学習習慣」に関する項目についても、教職員と保護者共に低い評価となっている。	小規模校のよさを生かし、これからも基礎基本の習得をめざした丁寧な学習指導を継続する。課題である「言葉の力」を育むため、引き続き「読書活動」の充実に取り組む。移動図書館や学校司書と連携し、読書の楽しさを感じさせるとともに、感想や考えをアウトプットする機会を設け生活との関連を図る。また、児童が自主的な「学習習慣」を身につけられるよう、家庭とも連携を取りながら粘り強く取り組む。学校と家庭との学習の接続を図ることや、発達段階に応じて自己調整・自己選択できる課題を用意し、家庭学習の意欲を高める。	家庭学習や読書の習慣は、一朝一夕には身につかない。また、学校だけでは無理なので、家庭との連携が大切である。タブレットやゲームの約束を設けるなど家庭内でルールを作り、時間の使い方を自主的に考えて利用する力を育むため継続して取り組むことが必要である。
	命と人権を大切にすることを教育を充実させ、思いやりの心を育む取組をしている。	自分は友だちを思いやり、大切にしていると思いつつも、安心して話ができるか少し不安に思っている児童がいる。また、教師の通訳がないともめごとの解決ができないなど、子ども同士の会話に気持ちを伝え合う力の弱さが見られる。児童が自分の気持ちを言葉にして出し合う場を教師がコーディネートしたり、授業中に子どもたちの発言する場を確保したりして言葉の力をつける必要がある。	教師がアンテナをはって、児童の望ましい言動を見つけて、即座にほめ、価値づけを心がける。朝の会や終わりの会などで、自分の気持ちを伝える練習をし、友だちの意見に傾聴した後、子どもたち同士で価値づけができるように、毎日意識的にトレーニングしていく。友だちの意見を聞く姿勢が思いやる姿勢につながり、ポジティブ思考や成功体験を増やすことで思いやりを感じ合い、安心感につながっていく。	学年を超えて児童同士が関わる姿があり、高学年が低学年の面倒を見るなど志手原のよき伝統が継続されている。児童同士で思いやりを感じ合い、安心感につながっていく取り組みは重要なので、機会を見つけて児童の心を耕してほしい。
体力の向上や毎日を健康で安全に過ごすための教育を充実させ、健やかな体を育む取組をしている。	朝の体力づくりトレーニングや休み時間の外遊びなど、進んで体を動かそうとする児童は多い。保健・体育委員会の活動として、ラジオ体操や鬼ごっこ、縄跳び検定など、体力づくりを促進する取り組みでも成果をあげている。学校としても保健だよりを発行し、保護者への啓発を継続して行っている。	体力の向上は、体育の授業だけでなく、休み時間や委員会活動など、教育活動全体を通じて取り組んでいく。インドア派の児童についても、体を動かすことの楽しさが感じられるよう、保健・体育委員会のイベントを充実し、運動を楽しむ機会を提供する。食育や健康教育については保護者の協力が欠かせない。引き続き保護者への啓発にも取り組んでいく。	子どもの体力が低下していると言われている昨今、朝や休み時間を利用して運動する機会を提供していることは大変よい。食育や健康教育についても継続して取り組んでもらいたい。	
研修 (資質向上の取組)	ICTを効果的に活用した主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりを行い、情報活用能力が向上している。	今年度より、「情報活用能力」の育成をめざし、ICTを効果的に活用した授業づくりを推進している。講師を招聘して授業研修会を行い、先進校への視察も積極的に取り組んだ。具体的な授業改善として、課題の設定、情報の収集・生分析・発信表現を授業過程に位置づけ、主体的・対話的で深い学びの実現に取り組んでいる。また、発達段階に応じて、タイピングやプレゼンテーション作成などICT活用スキルを系統的に育成している。	情報活用能力の育成をめざし、情報活用スキルを高め、情報活用場面を設定して授業づくりに取り組む。その際、なぜそのような学習や活動を行っているのか、そのことでどんな力がついているのかなど、児童の学びの様子を保護者が把握できるよう、学校だよりや学年だより、学級集会等で積極的に発信し、共有できる体制づくりを進めていく。	タブレットを活用した授業に取り組んでいるが、情報活用能力の育成により、児童がどのような力をつけているのかを、家庭に向け発信することをぜひ取り組んでいただきたい。

生徒指導	気持ちの良い挨拶をしたり、人を思いやった場に応じた言葉遣いのできたりするよう指導している。	挨拶・言葉遣いについては、児童の評価は高いものの教師と保護者の評価は共に低い。子どもは子どもなりに「自分は挨拶をしている」「適切な言葉遣いをしている」と思っているが、まだ十分でない。	「挨拶はしている」「適切な言葉遣いをしている」が大人には伝わっていないのはなぜかを児童に考えさせ、話し合い、児童自ら「挨拶運動」を実施していくように支援していく。また、学級指導でも「伝わる挨拶とは？」を考えさせるようにしていく。日々の教室でのあいさつを話題にするなど、めあてを一過性のもにしない学級指導が必要である。定期的に何度も指導したり、良いモデルを価値づけたりする。丁寧な言葉遣いについても合わせて指導していく。	挨拶は相手に気持ちが伝わらないと意味がない。相手を馬鹿にしたり不快な思いをさせたりする言葉遣いは絶対にいけないことを子どものうちから理解してほしい。学校だけでなく家庭や地域でも連携して取り組んでいきたい。
	「学校いじめ防止基本方針」に基づき、児童一人一人の悩みや不安に寄り添い、深い児童理解に根ざした指導をしている。	「学校や先生は子どもたちのことを考えてくれている」については保護者・児童ともに高い評価を受けているが、「先生に相談できている」については保護者の評価はやや低い。これは帰宅後に困ったことを先生には言わず保護者に話すことがあるためと考えられる。	児童が自分の言葉で自分の気持ちを表現できるように、日頃から気持ち表出の練習(学習)の機会を作り、スキルを習得させる。引き続き、学習面・生活面共に児童をよく見て対応し、適切に声をかけていく。1日の生活の中で、個人的に児童とコミュニケーションの場をとる工夫や日記などを利用して児童が困った時に相談できる環境を整える。また、児童同士のトラブルで先生が話をまとめるのではなく、「あなたはどうか考える?どうしたいのか?」と、児童の気持ちを引き出すような指導の機会を設けたい。意識するだけではなく、子どもと1対1の個人懇談を学期に1回設けるなど(教育相談週間)すべての教師が実践する。	相談体制の充実、今後益々必要になってくる。教師だけでなくスクールカウンセラーやソーシャルワーカーなど専門家や専門機関と積極的につながることが重要である。また、児童自身も困ったことや悩みを抱え込まず、何らかの形で伝えていける力をつける必要がある。先生が児童の気持ちに気付く手段として、アプリの利用も検討の余地がある。
	食育や保健指導を通して、児童の生活を改善し、生活習慣を向上させる取組をしている。	生活科、保健体育、理科、家庭科、給食時等において、担任、教科担当、養護教諭、栄養教諭が食育をはじめ基本的な生活習慣、健康増進についての指導を行っている。	給食指導の時間で、食事のマナーや姿勢を正すなど毎日の指導を続け、学級集会や通信等で家庭への啓発を図る。各教科および教科外活動において、児童自らが自律的に健康生活を送れるよう日常生活に直結した学習をさらに重ねていく必要がある。栄養教諭による専門的な授業をさらに取り入れていく。	今年度、家庭教育学級で給食交流会や栄養教諭による講座を受講した。学校と家庭が連携して児童の食育や生活習慣の向上を図りたい。
保護者、地域住民等との連携	「地域とともにある学校」づくりを推進し、課題を共有して情報提供を積極的に行い、共に教育に取り組むことができている。	対象を意識した的確でタイムリーな情報発信に努めてきた。保護者への案内は、今年度より主に「学びポケット」を用いたデジタル配信、地域には、従来通り紙のプリントによる案内を行ってきた。また、今年度より年度初めに教育課程説明会を開催し、新たな取り組みや家庭・地域と課題共有を行った。	教育活動の推進には家庭との連携が不可欠である。保護者の負担も考慮しつつ、保護者とのコミュニケーションの質的向上を図ることが必要である。教育課程説明会など全体へのアプローチと、学びポケットによるデジタル特性を生かした個別アプローチを使い分けながら、今後も家庭や地域とのタイムリーな情報共有を図っていく。	学校は、情報提供を積極的にやってもらっているが、デジタル配信を見ない保護者への案内をどうすればよいか考えていく必要がある。
	志手原校区地域づくり協議会や学校支援ボランティア、地域の人材を活用した教育活動を積極的に取り組むことができている。	放課後子ども教室や、毎朝の交通立ち番、給食サポートやミンボランティアなど、日頃から地域人材のサポートを得ながら教育活動を展開できている。また、自然豊かな地域性を生かした黒豆栽培や稲刈り、地域学習の講師など、様々な地域人材を活用した体験活動にも取り組むことができた。	本校では地域人材を活用した教育活動が定着しており、今後も無理なく継続していきたいと考えている。なお、人材を活用した学習活動については、カリキュラムを整理するとともに、探究的な手法を用いて、学びに深みをもたらす工夫が今後必要であると考えている。	地域の人材を活用した教育活動を推進することが出来ている。今後も継続して取り組んでいきたい。